

事例から学ぶ

介護事業者の事故対応

誤えん事故の調査報告書で救急車要請が5分ピッタリの理由

－なぜ短時間で119番通報ができるのか？－

■ある誤えん死亡事故の調査報告書

A特養で誤えん死亡事故が発生しました。A特養が所属する法人では、死亡事故が発生した際は必ず、家族向けに事故の調査報告書を作成することが義務付けられています。今回の事故後も法人本部と相談しながら調査を開始しました。亡くなられた利用者は、半年前から食事中的ムセが多くなってきたため食事姿勢を正すクッションなどを導入していました。今回、法人本部では万全を期すため、顧問契約をしているリスクコンサルタントの意見も聞きながら報告書を作成しました。

幸い事故の未然防止対策についてはきちんと対策が行われていたため、コンサルタントからも「無過失でしょう」と見解をもらっていました。次は事故発生時の対応の検証です。コンサルタントは事故現場で対応に当たった主任に、「199番通報・救急車の要請」の時間を訪ねました。主任は「誤えん発生後ピッタリ5分です」と答え、記録も「5分00秒」となっていました。「なぜピッタリなのか？」と尋ねると「現場で一番若い介護職員が時間を計って5分間経ったところで、救急車を要請したのでピッタリなのです」と答えました。この施設の事故対応マニュアルでは、現場で一番若い職員が時間を計り5分経ったらその職員が救急車の要請を行うことになっていたのです。

救命対応を行う職員が時間を測ると遅れることがある

■救急車の要請は誤えん発生後5分が鉄則

誤えん発生時の対応で最も重要なことは、迅速な救急車の要請です。では、何分で救急車を要請したら良いのでしょうか？一般的には、呼吸が停止すると15分で救命率がゼロになるといわれており、救急車の到着所要時間7分(平均値)を考慮すると、救急車要請までが5分程度ということになります。では5分ぴったりで救急車を呼ぶことは可能でしょうか？

一般的な誤えん発生時の対応マニュアルには、救命対応の手順が次のように書かれています。

誤えんに気付いたらすぐにハイムリックや背部叩打法などの異物除去の対処を行い、効果がなければ看護師を呼んで吸引を要請する。看護師は吸引を施行して効果がなければ救急車の要請を行う

しかし、この通りに救命対応を行うと10分くらいはすぐに経過してしまうことになり、対応を変えなければなりません。

■正しい救命対応方法は？

迅速に救急車を要請するには、誤えん発生時の対応マニュアルを見直さなければなりません。次のように対応することで5分で救急車の要請が可能になります。

- ①誤えんの発生に気付いたら、迅速に看護師に吸引を要請する。
- ②介護職は看護師が吸引を開始するまでハイムリックなどの救急救命措置を行う。
- ③看護師は吸引を開始する時に救急車を要請し、救急車到着まで吸引を施行する。

しかし救命対応を一所懸命やっている職員が、時間を正確に測ることは容易ではありません。対応に集中して救急車の要請が遅れることはあってはいけません。そこで、この法人では誤えんが発生した時に、その場で一番若い職員に対して、時間を測ることを指示して、5分経ったら誰の許可も求めずにその職員が救急車の要請を行うようにしていたのです。救命対応をきちんと行いながらも、救急車の要請が遅れないよう工夫がされていたのです。

発行責任者

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社
マーケット開発部 市場開発室
担当 堀江・窪田
TEL 050-3462-6444

担当課・支社 代理店